

都道府県別賞一等

ばあちゃんのがんばり賞

兵庫県 関西学院中学部 一学年

松浦 太亮

「はい、がんばり賞。」

そう言って、僕の祖母はいつぱいの笑顔でおこづかいを渡してくれる。もらう僕もうれしいけれど、渡す祖母の方がもっと喜んでるように感じる。たとえば、決してよい順位ではないマラソン大会の賞状や英語のスピーチコンテストに出場しただけでもだ。

祖母は七十五歳で孫が十一人もいる。誕生日、クリスマス、お正月のおこづかいだけでも総額三十三万円。これにみんなのがんばり賞が加算されると、とても高額な出費になると思う。祖母は一人暮らしでももちろん仕事はしていない。僕は『孫もいつぱいいるのにこんなにたくさんもらっていいのかな?』という気持ちになり祖母に聞いてみた。

「ばあちゃんは、ちゃんと個人年金保険をたくさんかけてきて、『生きている間は黒字経営』やから心配せんでいい。ばあちゃんは孫たちにあげるのがうれしいねんや。」

と言った。僕は「保険」や「個人年金」と言う言葉の意味がよくわからなかった。僕には姉が二人いて長姉が生命保険会社、次姉が損害保険会社で働いている。今まではその違いさえ興味がなかった。そこで、姉たちに聞いてみた。すると、「保険とは、家族や自分にもしも病気や事故などで悲しみや苦しみが起こった時に役立ち、その後も安心して暮らせるように人々を支えるもの。」

と話してくれた。種類も事故、ケガ、火事、地震、死亡、入院、介護、損害賠償、学資準備のための保険、個人年金保険などたくさんあるそうだ。

「個人年金保険は、年老いて年金生活になったときに自分で好きに使えるお金を貯めておくもの。」
と教えてくれた。

「ただ、若い頃には生活費や税金を支払ったあとのお金で旅行などに行きたいのに、将来のリスクに備えるための個人年金保険をかけることにはなかなか手がまわらないものだ。」
とも言っていた。

それで僕はあらためて祖母に、なぜ個人年金保険をかけたかを聞いてみた。一つは祖母が郵便局に勤務していたとき、年老いた人が少しのお金でも貯金する姿を目のあたりにし、生活のための預金ではなく、自分自身のための自由

第54回中学生作文コンクール

に使えるお金を残したいと考えたからだそうだ。もう一つは、祖母の義母の入院の支払いで毎月十万円近くのお金を払わなければいけない時期があったことだそうだ。その時に『自分は将来子どもたちに迷惑をかけたくない。』という気持ちが大きくなり、きりつめてでもお金を残そうと思った。個人年金保険を選んだのは、『老後まで使わずに置いておいて、元気なら楽しいことに使いたいな。』と考えたからだそうだ。

このようなことを聞いて、保険は人生において大切なものと初めて知った。未来のことを予測して考え、努力したことで、今の楽しみや幸せが増えているのだなと感じた。このようにいろいろな使い道がある個人年金保険は、祖母自身の『がんばり賞』だと思った。

これからますます少子高齢化になって受け取れる公的年金が減るかもしれない。僕が働いた時、未来の自分への『がんばり賞』の準備をはじめたいと思う。